

個々のアイデンティティ形成を目指す帰国生徒教育 —多様なエスニシティを基盤として—（最終年次）

I 主題設定の理由

現在、約7万8千人の義務教育段階である日本人の子どもが海外で生活している。また、海外に1年以上在留した後に帰国する子どもの数は平成26年度間には約1万2千人にも上った。我が国の帰国生徒教育は、「①学校生活への『適応教育』に始まり、②帰国生徒の個性の『保持・伸長教育』や③海外における学習・生活体験を尊重した『異文化教育・国際理解教育』へ、さらには、④帰国生徒と一般生徒との『相互交流学習』とその重点を移行させてきた。」¹⁾

そのような中、本校は中部地方初の帰国子女学級を開設し、36年間に渡って帰国生徒教育を実施してきている。開設当初は、帰国生徒の海外生活に起因する学習の遅れを取り戻させ、生活習慣の違いに順応させるという適応教育からスタートした。その中で、海外で身に付けた特性（個性や能力）の保持、伸長を図ることや一般学級生徒（以降：一般生徒）との相互交流活動（教科の授業、道徳、総合的な学習の時間、学級活動、学校行事）を通して、様々なものの見方や考え方を理解させることにも取り組んできた。また、本校の帰国生徒教育では、次に掲げる帰国生徒教育方針に基づいて行っている。

- 子どもたち一人一人をよりの確に捉え、子どもたちの実態に合ったきめ細かい指導を心掛ける。
- 子どもたちに適した環境づくりに努め、早期適応を図る。
- 海外での教育条件によって生じた学習内容の不足を補充する時間を設ける。
- 海外で身に付けた特性の伸長・活用を図る。^{注1)}
- 一般生徒との交流を通して、様々なものの見方や考え方を理解させる。
- 海外における体験をいかした一般学級との相互交流学習において、異文化理解・国際理解教育の推進を図る。

前研究シリーズでは、「帰国生徒の自己を育む教育課程の開発 —個々の状況を踏まえた取組を通して—」を主題として、「帰国生徒カルテ」を参考に各帰国生徒の学習適応の状況から個々に必要な学習支援を見付け、授業に取り入れることができた。しかし、帰国生徒教育でこれまで重要視されてきた、帰国生徒としての特性を活用させながら、アイデンティティを形成するという視点が不十分であった。

我が国の帰国生徒を取り巻く環境は、国際結婚による子どもや日本国籍をもたない子どもの増加、海外勤務者の中に日本人学校や補習校を選択せずに現地校を選択する動きが出てくるといったように変化してきている。佐藤郡衛氏は、この変化によって、帰国生徒教育は「日本人」というカテゴリーを固定化するのではなく、カテゴリーそのものを問い、「日本人になっていくこと」を主体的に選び取っていけるような教育の在り方を構想する必要があると述べている。

以上のことから、個々の帰国生徒の状況を踏まえつつ、「適応教育」「特性の伸長・活用」「相互交流学習」を調和的に行いながら、個々の子どもに日本の学校、社会に対するエスニシティ^{注2)}を育み、帰国生徒のアイデンティティ^{注3)}を形成する必要があると考え、本研究主題を設定した。

Ⅱ 研究の概要

1 目指す子ども像

自らの特性の伸長・活用を図りながら、日本人として日本の社会にエスニシティをもち、アイデンティティを形成する子ども

「特性」とは、単に語学力だけを意味するのではなく、海外で身に付けた自分のものの見方や考え方を積極的に相手に伝えようとする姿勢や合理性を追求する態度を始めとする言動や思考様式も含んでいる。「日本人として日本の社会にエスニシティをもち」とは、日本語や日本の生活様式を学び、それらを受け入れるだけではなく、日本社会に帰属意識をもつということである。

幼少期を海外で過ごした子どもたちの多くは、在留地の学校や社会にエスニシティをもっており、帰国後間もない時期は、日本人であるにもかかわらず、日本の社会に適応できずにいる傾向が強い。学校生活に目を向けると、生活面での習慣の違いに戸惑ったり、基礎知識の不足からくる学習面の遅進により自分の考えに自信がもてずいたりすることがある。日本の法律に基づいた教育を受けることができなかつた子どもや保護者は、学習面を含めた日本の学校生活に適応できるかどうかや、海外で身に付けた特性の伸長・活用が期待できるかどうかを不安に感じていることが多い。

そのため、日本の社会に対するエスニシティを育み、帰国生徒のアイデンティティを形成する必要がある。

2 エスニシティを育むために

エスニシティを育むためには、一方的に日本の学校、社会の価値観を押しつけるのではなく、帰国生徒学級に在籍し、帰国生徒としての特性を保持したまま、帰属できる集団を徐々に増やしていくことが必要であると考えられる。

そこで、はじめに、ふだんの生活を安心して送れるように帰国学級へのエスニシティを育むことを促す。同じ体験をしている帰国生徒でも、滞在していた国が違っていたり、滞在年数が違っていたりする。そのため、互いに育ってきた環境の違いを把握させ、認めさせることで帰国学級へのエスニシティを育むことが促されると考える。

次に、相互交流の場面においては、帰国生徒に自分の考えを表出させるようにする。自分の考えを一般生徒にも認めてもらうことで、交流学級へのエスニシティを育むことを促す。さらに、学力補充においては、日本語話者としての能力向上や教科の学習における学力向上をさせることで、自分の考えに自信をもたせ、その考えを表出できるようにしていく。そうすることで、自分の考えを相手に認めてもらうことができ、交流学級へのエスニシティを育むことが促される。同時に、帰国生徒としての特性の伸長・活用にも努めさせる。英語の授業を始め、留学生交流会などの場面においては、海外で身に付けた語学力や外国の文化に対する知識などをいかし、一般生徒にその特性を認めさせていく。そうすることで、帰国生徒として自己肯定感をもたせることができ、学校全体へのエスニシティをもち始めると考える。学級、交流学級、学校と徐々に大集団へのエスニシティを育むことを促し、最終的には日本社会へのエスニシティを高めさせる。このように、多様なエスニシティを基盤として日本の社会へのエスニシティを育み、帰国生徒のアイデンティティの形成につなげていく。

3 育みたい資質や能力

目指す子ども像を達成するためには、「適応教育」「特性の伸長・活用」「相互交流学習」の全てを調和的に行いながら、次のような資質や能力を育てていく必要があると考える。

- ① (大集団の中でも) 自分のものの見方や考え方を表出することができる力
- ② 自分と異なるものの見方や考え方を知ろうとする態度
- ③ 自分のものの見方や考え方を見直し、再構成することができる力
- ④ それぞれの立場を尊重しながら、共に活動しようとする態度

①、②については、学習活動やそのねらいによって、順序が変わることもある。

4 資質や能力を育むための手だて

(1) 「適応教育」「特性の伸長・活用」「相互交流学習」における場面の設定

上記の資質や能力を育むために、「自分のものの見方や考え方を表出する場面」「自分と異なるものの見方や考え方を知る場面」「自分のものの見方や考え方を見直し、再構成する場面」「それぞれの立場を尊重しながら、共に活動しようとする場面」といった四つの場面を、活動の内容に応じて設定することを考えた。

自分のものの見方や考え方を表出する場面

自分のものの見方や考え方を表出することは、自分のものの見方や考え方を具体的な言葉として表すことであり、自分の文化的背景を表出することでもある。そのために、この場面を設定し、自分のものの見方や考え方の表出を促すことで、力を育てていく。

自分と異なるものの見方や考え方を知る場面

自分のものの見方や考え方が他者とは違うということを知ることは、多様なものの見方や考え方を受け入れる素地となるものである。そのために、この場面を設定し、自分と異なるものの見方や考え方への気付きを促すことで、他者又は自分のものの見方や考え方に含まれていたが、気付いていなかったものの見方や考え方を知ろうとする態度を養っていく。

自分のものの見方や考え方を見直し、再構成する場面

自分のものの見方や考え方を見直し、再構成することは、自分のものの見方や考え方を広げたり、深めたりしていくことである。そのために、この場面を設定し、他者と自分のものの見方や考え方を比較させ、自分のものの見方や考え方を見直し、それを基に再構成させていくことで力を育てていく。

それぞれの立場を尊重しながら、共に活動する場面

共に活動していこうとすることは、相互交流学習における究極の目的である。そのために、学級活動を始めとした学校生活の様々な場面で再構成したものの見方や考え方を取り上げ、振り返らせる。こうした活動を通して、再構成したものの見方や考え方を基に、共に活動していこうと

する態度を養っていく。

(2) 子どもの実態を把握するための「帰国生徒カルテ」

帰国学級の子どもたちの適応の実態は多様である。そのため、個々の帰国生徒に対して適切な支援を行うためには、子どもの実態把握を欠かすことができない。そこで、「帰国生徒カルテ」（資料1）を作成し、子どもの実態を学習と生活の両面から捉えるようにする。

「帰国生徒カルテ」の学習面における記述は、教科担任と学級担任が主に教科や領域に関わる日本語支援に重点を置きながら、「表現」「理解」「態度」の3観点とそれに対する「支援の手だて」について行う。加えて未習領域調査を各学年の4月や編入学時に行うことで、一人一人の学習の状況を把握することができ、それを踏まえた上で、教科の授業や学力補充において適切な支援を行うことができる。

生活面における記述は、担任による普段の生活の観察や学年職員との情報交換、子どもとの教育相談時の内容、帰国学級（E組）保護者会といった保護者との相談内容も取り入れ、帰国生徒と保護者、学級担任、学年職員の四者の視点から行う。加えて担任は、個々への支援の手だてを記述することで、生活面における子どもの適応の状況を把握し、適切な支援を行うことができる。

5 本研究シリーズ4年間における研究計画

年次	研究内容
1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・帰国生徒教育研究理論の確立 ・道徳授業の提案 (本校道徳カリキュラムを基に、帰国生徒の状況を踏まえたもの) ・「帰国生徒カルテ」を踏まえた授業(道徳)の提案
2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・帰国生徒教育研究理論の見直し ・「帰国生徒カルテ」を踏まえた授業(教科)の提案 ・教育課程の作成(学級活動, 行事)
3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・帰国生徒教育研究理論の見直し ・日本語教育カリキュラムの見直し ・教育課程(学級活動, 行事, 補充)の見直し ・「帰国生徒カルテ」の見直しと、それを踏まえた授業の提案
最終年次	<ul style="list-style-type: none"> ・帰国生徒教育年間計画の提案 ・研究のまとめ

6 研究の経緯

1年次では、理論の構築と目指す子ども像を達成するために、育みたい資質や能力の中でも、特に「自分のものの見方や考え方を見直し、再構成することができる力」の育成を目指し、「適応教育」「特性の伸長・活用」「相互交流学習」を調和的に行いながら、「自分のものの見方や考え方を見直し、再構成することができる場面」に焦点を絞り、道徳の授業を行った。この授業では、帰国生徒が授業において必要とする支援を「帰国生徒カルテ」を基に把握し、表現支援と、理解支援を行った。その結果、適切な日本語で自分の考えを仲間に伝えたり、仲間の考えを理解したりすることができ、自分の考えを見直したり再構成したりすることができる子どもが増えていた。したがって、自分のものの見方や考え方を見直し、再構成したりすることができる力を育成することができたと考える。

そこで、2年次では、教科の授業において「自分のものの見方や考え方を見直し、再構成することができる力」を育むことを目指して取り組んだ。理科の学習では、「帰国生徒カルテ」より支援の手だてを見だし、授業で活用することで、語彙を増やし、それを活用して考えを仲間に伝えよ

うとする姿や、それを教師や仲間から褒められ、嬉しそうにする姿が見られた。こうした一つ一つの重ねが自己肯定感を生み、エスニシティにつながっていくと考える。一方で、「帰国生徒カルテ」の活用について新たな課題が明らかとなった。それは、学習面と生活面ともに、把握する内容が多いことから、手だてを見いだしづらかったことである。

3年次では、精選された「帰国生徒カルテ」を活用し、日本語支援を行いながら表現支援と理解支援を行い、ある程度適応の進んだ帰国生徒が大集団の中でも自分のものの見方や考え方を表出したり、帰国生徒の特性を發揮したりすることを目指し、道徳の授業で実践を行った。その中で、帰国生徒が海外在留経験を踏まえた意見を述べ、その意見に交流学級の子どもが納得をし、意見を見直していく場面があった。また、その後の生活では大集団に対して自分の意見を述べたり、様々な役割を進んで引き受けたりするといった、集団の中で主体的に活動する姿が見られた。以上のことから、「適応教育」「特性の伸長・活用」「相互交流学習」の全てを調和的に行いながら、自分のものの見方や考え方を表出させたり、自分と異なる考え方を知ったり、自分のものの見方や考え方を再構成させたりする場面を設定することが、エスニシティを育み、帰国生徒としてのアイデンティティを形成することにつながるということが明らかになったと考える。しかし、大集団の中で自分のものの見方や考え方を主体的に表出する子どもが限られた。これは、大集団の中で自分の考え方を主体的に表出することに慣れていないことが原因であると考えられる。また、行事や限られた授業においては相互交流学習は行われているものの、そのみでは交流学級へのエスニシティが高まらなかったためであると考ええる。

7 最終年次のねらい

道徳の授業において、帰国生徒の特性を發揮しやすい場を設定し、必要に応じて「帰国生徒カルテ」から手立てを講じて表現支援と理解支援を行いながら、集団の中で自分のものの見方や考え方を主体的に表出させていく。そうすることで、様々な交流学習や大集団の中で、自分のものの見方や考え方を主体的に表出し、日本の社会にエスニシティをもち、帰国生徒としてのアイデンティティを形成する子どもになっていくことができると考える。

注1) 前研究シリーズまで実施していた「保持・伸長」を「伸長・活用」に表記を改めた。今日の帰国生徒教育の動向から、帰国生徒がもっている特性を伸長するのはもちろんのこと、活用させながら日本の社会に適応することが求められている。

注2) エスニシティとは、1970年代アメリカ合衆国社会科学において使われ始められた言葉であり、文化的背景に共通点をもつ集団への帰属意識のことである。「エスニシティを育む」とは、一方的に日本の学校、社会の価値観を押しつけるのではなく、帰国生徒学級に在籍し、帰国生徒としての特性を保持したまま、帰属できる集団を徐々に増やしていく考えである。

注3) アイデンティティとは、人が自分のことを何者であるかと知り、自分が自分であることを確信することである。

引用文献

1) 成田喜一郎「第7章 第6節」佐藤郡衛『転換期にたつ帰国子女教育』多賀出版、1995年

参考文献

白井智美編集『イチからはじめる外国人の子どもの教育』教育開発研究所、2009年

お茶の水女子大学附属小学校『開設25周年 帰国児童教育実際指導研究会研究紀要「ともに学びを創造する」』

お茶の水女子大学附属中学校『第5回 帰国子女教育研究協議会 帰国子女教育学級創設25周年「個の自立を支え、相互啓発の学びを促す」－多文化教育の視点で学校教育を見直す－』

河原俊昭、山本忠行、野山広編・著『日本語が話せないお友だちを迎えて』くろしお出版、2010年

海外子女教育振興財団『帰国児童生徒受入れ校に関する情報について』

(<http://www.joes.or.jp/g-kokunai/index.html>) (参照2014年8月20日)

窪田佳尚代表『異文化との共生をめざす教育－帰国子女教育研究プロジェクト最終報告書－』三友社、2001年

佐藤郡衛『転換期にたつ帰国子女教育』多賀出版、1995年

帰国生徒教育

佐藤郡衛『国際化と教育－異文化間教育学の視点から－』財団法人 放送大学教育振興会, 2003年

佐藤郡衛『国際理解教育』明石書店, 2001年

佐藤郡衛『異文化間教育 文化間移動と子どもの教育』明石書店, 2010年

成田喜一郎「第7章 第6節」佐藤郡衛『転換期にたつ帰国子女教育』多賀出版, 1995年

文部科学省『施策の概要』〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001.htm〉(参照2012年4月2日)

文部科学省『JSLプログラム』〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/011.htm〉(参照2012年4月2日)

文部科学省『海外で学ぶ日本の子どもたち』〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/oo2/001.htm〉

(参照2015年12月18日)